

## 山口玄洞の軌跡をたどる

岡村敬二

はじめに

聖トマス学院のその以前の所有者は山口玄洞であった。玄洞は尾道の出身で、大阪において財を成した実業家である。その玄洞は晩年には自らの会社を後進に譲り、京都市梶井町御車通のこの場所に居を移して信仰とともに生き、また儲けた財を惜しげなく、郷里の尾道はじめ京都や滋賀の寺院に堂塔を寄進し、大阪に病院や研究所を建て、施設などに対して多くの寄付をおこなった。それは仏道をもとに慈善の心をもって社会に私財を還元しようというものだった。もう少し敷衍して言うとするれば、祈る気持ちで真に湧き出てくるような寺院を整備し、そうした環境を整えるために財を還流させ、当時の社会に相対し貢献するというものであった。

こうした山口玄洞については、文末の解題で示したように、その事績や会社史についてはすでに多くの研究があり、ここで何かを新しく付け加える必要があるわけではない。ただこの玄洞の、御車通山口本邸を拠点とした仏道に基づく寄付寄進の行ない、その真情の深さは、その後のある時代、住人を替えた聖トマス学院において、

熱い血潮をみなぎらせて活動を繰りひろげた人たちと、こころの奥底ではどこか合い通じるものがあるかもしれないと、そう考えて論述することにしたのである。またそのように時代を通底するある真情を考えてみることで、自身の内省の行ないもまた可能となるかと思ひ、玄洞の寄付寄進に至る過程を中心にその軌跡を追ってみることとした。

このように考え始めたのも、実は聖トマス学院つまり旧山口玄洞本邸という御車通のあの場所に実際に出かけて内部を見学させてもらい、その場所というものが持っている強さというか、磁場というか、なにか惹き合うものというか、縁や繋がりと行ってよい、そのような感じを持ったからである。時と時代の流れ、という留まることのない時間軸のなかで、それぞれ異なる時間を、この場所において、人びとが生きて連なりあつて暮らしていたということ、そしてその暮らしの中で、それぞれの思想に基づいて、社会に対して何か身を投じようとしていた、そのような時代の行ないを、この聖トマス学院という場所は、強く示してくれていると思つたからであった。

特段に何も語っていないかにも見えるこの当たり前のことからではあるが、この聖トマス学院と旧山口玄洞本邸とがなにか強く惹き合い、繋がり合っているという感じを強く持ったということだけは申し述べておきたい。

そんなことを考えながらここでは、玄洞の歩んできた道のりのなかで、社会貢献や社会還元の活動に至ったバックグラウンドを感じてみるために、玄洞の軌跡をたどり、社会への還流である寄付寄進の痕跡を、自身が追体験してみたい考え、書き始めた。

## I・尾道時代

山口玄洞は文久三（一八六三）年一〇月一〇日、尾道市久保町に生まれた。幼名を謙一郎という。山口家の祖先は九州島原北目多比良村に位置する温泉神社の社家といい、寛文七（一六六七）年五月に屋敷内稲荷神社の位を授かるために伏見稲荷に出向く途中で船が難破し尾道に漂着、そのまま尾道で医業を営むこととなった。そのときに山口姓を名乗ったという（『山口玄八十年史』）。玄洞の父親は三代目にあたり寿安、当初は尾道郵便局付近の土堂町に住していたがのちに久保町に転居、代々医者であったがかわらで醤油も売ったりした。父の寿安は、仏道に基づいた慈悲の心と聖賢の教えを大切に思う医者

で、医者でありながら診療代をとらないこともあり、また貧しいものには無料で醤油を差し与えたともいう。こうしたことから寿安は地域の人びとから慈父のようにして慕われた。晩年に玄洞がさまざまな慈善の行為に身をささげるようになるのも、こうしたこの父親の後姿をみて育ったが故のことであろう。

港町でもある尾道の空気が子供の成育のための環境としては必ずしもよくないと考えた寿安は、玄洞を愛媛県側の岩城島の藤井氏の漢学塾に入学させてそこで暮らさせた（立野米太郎『尾道光華録』尾道光華録編纂事務所 昭和三年）。父親の寿安は、慈愛あふれる手紙を玄洞に書き送り、それを玄洞は後生大事にし巻物として残した。これは玄洞没後に手箱から発見されその後代々引き継がれていく。その全文が『八十年史』に載っているが、それはまことに慈愛にあふれたものであった。たとえば日々の暮らしについては、「先日相送り申し候枕ハ余り高く御座候て弁理よろしからず候得は茶枕相調へ送り進し申すべく候哉御しらせ申さるべく候」といった身の回りのことや、「食合候てあしきもの／・章魚たこに梅・猪肉ちよくに生姜・圓豆えんどうに南京瓜なんきん」といった食生活の注意事項、さらには「咽二骨のたちたる時ハ左ノ通り之文字を茶碗のへりへ墨にて書、アピラウンケンソワカラ十遍唱へ水ヲ入レ解き吞べ



父親の書翰に「生鬼同根萬物一鉢」とある。この文字を茶碗に書いて呪文を唱えるとよいと書かれていた(『山口玄八十年史』より)。

し／魚ノ骨其外竹木のそべら二もたちたる時ハぬける也  
／生鬼同根萬物一鉢／・生ノ字ヨリトキ始メ次第第二トキ  
テ吞ヘシ云々」といった、のどに骨の刺さったときの  
対処方法など、細かなことまでを書き送っている。また  
「朝夕／神様を御拝み成さるべく候」「御守を籠末ニせぬ  
様大切ニ御持ち成さるべく候」「萬事／先生の仰を背か  
ぬ様相守申すべき事」(注：筆者が一部読み下した箇所がある)  
などと、こまやかな愛情と礼儀礼節を重んじる教えに満  
ち満ちた書翰であった。こうして慈しまれて育てられた  
玄洞であり、かれの将来の姿が見えてこようというもの

である。

こうして学業に励んでいた玄洞であるが一五歳の明治  
一〇(一八七七)年、父寿安の訃報に接することとなる。  
愛情に包まれて成長を遂げていた玄洞であるが、この父  
親の死去にともない、学業も成就とならず、一転して日々  
の糊口のため荷車を引いて荒物を売り歩く毎日に転じて  
しまった。この引き売りによりなんとか家族の暮らしを  
立てていたものの、これでは将来も見えてこないと考え  
た玄洞は母に願って大阪に出ることを決心する。明治一  
一年のことである。玄洞は郷里尾道を発つにあたって浄  
土寺の十一面観世音菩薩に向かい、心願成就の暁には必  
ず銅の燈籠を寄進すると誓ったのだという。

## II. 大阪時代

こうして明治一一(一八七八)年、玄洞は大阪に出る。  
大阪では本町四丁目心齋橋東入土居善洋反物店の店主と  
なり「清助」と呼ばれて一心不乱に働いた。店主の土居  
善助の覚えもよく将来嘱望される店員として働いていた  
が、明治一四(一八八二)年になりこの土居善が不運に  
も倒産し閉店という憂き目にあつた。たまたま閉店の前  
日、玄洞の信頼を得ていた鳥取の客が信用扱いで反物の  
品をそろえてほしいと依頼して玄洞のもとに千円を置い

て京都に去っていった。玄洞はこの千円をどうしたものかと熟考をした結果、翌日店が閉店となるや京都に発ち、この千円を無事鳥取の顧客に返還したのだという。この実直さが実を結び、玄洞はこの鳥取の商人の力添えを得て、鳥取から来る商人の定宿である泉甚に数人と寝泊りして商売をし、信頼を勝ち得て明治一五年、伏見町五丁目横堀二丁目（筋かい橋東詰め角）に間口一間半の店舗を開くことができた。名づけて洋反物商山口商店とした。これが第一代目の店舗である。店内には帳簿笥と算盤と長帳だけというささやかな出立であった。

洋反物の扱いは、文字通り外国からの輸入で、外国商館が輸入して問屋に卸し、仲買人から小売店へと流通させる。玄洞の山口商店は地方の顧客の注文を受け、注品を問屋から購入して売り渡すという仲買人として商売をしたわけである。商売も少しずつ軌道に乗り始めたのだったが、郷里に残してきた三人の弟のうち豫次郎と晋四郎の二人が早世してしまい、親戚に身を寄せようとしていた母親の節と三番目の隋三郎、妹お升とを大阪に呼び寄せることとした。そして鳥取商人の例にもあるように清助は誠実を第一とし、昼も夜も不眠不休の働きをもって信用と資金を蓄積していったのである。

明治二五（一八九二）年には淡路町五丁目に店舗を借



玄洞が誓いを立てた尾道の浄土寺。大正13年に心願成就の銅燈籠を寄進したのだが、戦時の供出でいまはない。2012年1月24日撮影。



若い時期の玄洞（『山口玄八十年史』より）

り（第二代店舗）、また玄洞は京都錦小路東洞院東入ルの岩室五郎兵衛の長女政子と結婚もし、店員も雇って商売を軌道に乗せていった。日清戦争の折には取り扱い品が軍需物資でもあったことから大きな利益を上げた。明治二九（一八九六）年には山口家第四代玄洞を襲名する。三四歳のことである。明治三一年のときに繁華な本町三丁目二四番地に土地を購入して店舗を設けた（第三代店舗）。

そして明治三四年五月、玄洞はようやくもって故郷に錦を飾るその時がやってきたのである。これまで商用で

幾度か尾道を通ることがあっても、決して尾道の市街には足を踏み入れず、ただただ心願成就を果してからの帰郷を念じていた玄洞にとつて、ようやくの尾道帰還であった。先祖の菩提寺である西国寺の墓参と、尾道を出るときに心に誓った浄土寺への建碑、そして蘇和稻荷神社の整備をその目的として尾道に降り立ったのである。

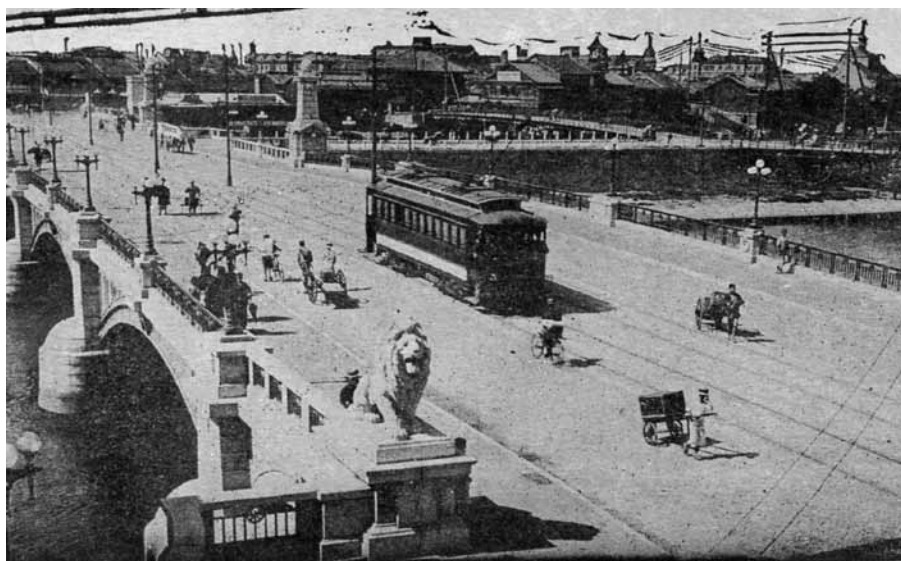
西国寺への墓参のち玄洞はすぐさま市役所に出向いて女子高等小学校に一万円の寄付をおこない、翌六月には西国寺に井戸の屋形を寄進する。こうして会社の利益を社会へと還元していく玄洞の慈善事業が開始されることとなったのである。

明治三七（一九〇四）年には多額納税者のひとりとなり、九月に貴族院議員となった。四二歳のことである。山口商店経営のほか、三十四銀行取締役、大阪織物同業組合初代組長にも就任している。日露戦争後は我が国の紡績業も興ってきて洋反物を扱う業種は熾烈な競争にさらされた。大阪の町の発展著しく、本町の通りに市電も開通してにぎやかになり、玄洞もますます仕事に打ち込んだ。

その後仕事は順調に運んでいき、本町の店が狭隘となつて大正元年一二月に現在の山口玄ビルの場所である備後町四丁目の角地に移転した。土蔵造りの立派なもの



玄洞が寄進した尾道西国寺の井戸屋形。天井に田能村直入筆の龍の絵が描かれていたが今は風化してみえない。2012年1月24日撮影。



北浜の難波橋（ライオン橋）を走る大阪市電。山口玄洞の社がある本町通りではないが当時の雰囲気を感じることはできようか（絵葉書）。



蘇和稲荷神社。山口家の祖霊であった稲荷社を明治35年7月尾道市土堂町海岸に社殿を奉安。のち昭和11年9月23日尾道駅前にはるため遷宮祭をおこなった。この年の暮れに玄洞は病状重篤となりこの移転を急がせた。2012年1月24日撮影。



蘇和稲荷神社境内の「山口玄洞翁頌徳碑」。銅像建設などを断わった玄洞だが、邸内神社として祀った蘇和稲荷神社奉祀と水源地の石碑への揮毫については承諾した。この頌徳碑は昭和30年3月5日に除幕式が行われた。尾道短期大学学長田中瑞穂撰文 広島大学井上政雄書。2012年1月24日撮影。

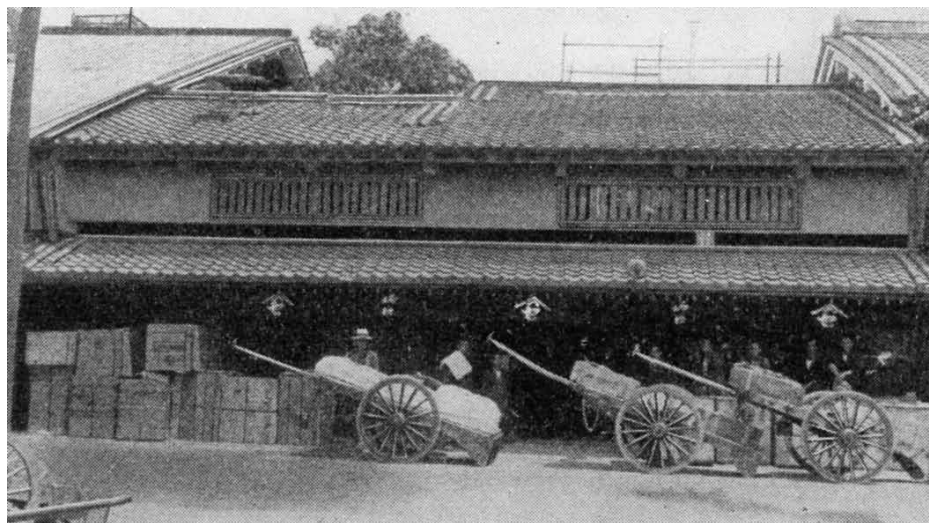


久山田水源地の雨之水分（あめのみくまり）神社。この水源地の道路側には玄洞揮毫の碑文が建っている。2012年1月24日撮影。



第二代玄洞が寄進した久保八幡神社の水盤。石碑が建つがその裏面に「水盤天保七年九月先代山口玄洞造之水屋 明治三十四年六月現代山口玄洞建之」とある。2012年1月24日撮影。





土地を購入して開店した本町三丁目の本店。第三代店舗である  
（『山口玄八十年史』より）



備後町四丁目の本社があった場所に後年山口玄ビルが建つ。こ  
れは四代目の社屋ということになる。（『仰景帖』昭和13年より）

で二階三階は商品陳列場、正面左に洋館の貿易部、ほかに倉庫もならば約五百七坪のものであった。

こうした会社の繁栄とはうらはらに、玄洞の健康は不安定なものになる。仕事の毎日は、早朝に起床し寒中も水風呂をあび、神仏に祈念して仕事に向かうというものであった。日々の激務による無理が玄洞の身体にも影をおとし、不眠に苦しみ神経も衰弱してきた。そして大正六年玄洞はついに引退することを決意する。山口商店を株式会社へと再編し引退して京都御車通の本邸に移るこ

### Ⅲ・京都時代

玄洞は大正三（一九一四）年九月に京都邸宅の建築を始めている（略年表『山口玄八十年史』）。そして大正六年、玄洞は会社の現役を引退した。五六歳のことである。以後はこの本邸を拠点にして信仰のもとに生き、諸所に寄進を繰り返していくこととなる。

本邸のある御車通は河原町通の一本東の通りで屋敷のすぐ東は鴨川である。昔は伏見宮に続く梶井宮家の御領地で、もう少し南にいけば丸太町に出る手前に頼山陽の山紫水明処もある。このようにここは東山の望める格好の住宅であり、玄洞の身体を休めるにも心を癒す場所と

るす飛雄に界世  
屋問物反洋大二我  
店商駒村田  
店商口山

てし脱を城の屋問物反洋的國內にく風  
を出進外海の等物織組人-布組工加布織  
しま覺目に實業活の部出輸共時近て企

大阪朝日新聞 昭和9年2月12日 「世界に雄飛する我二大外洋反物問屋 田村駒商店 山口商店」(京都府立図書館所蔵マイクロフィルム)

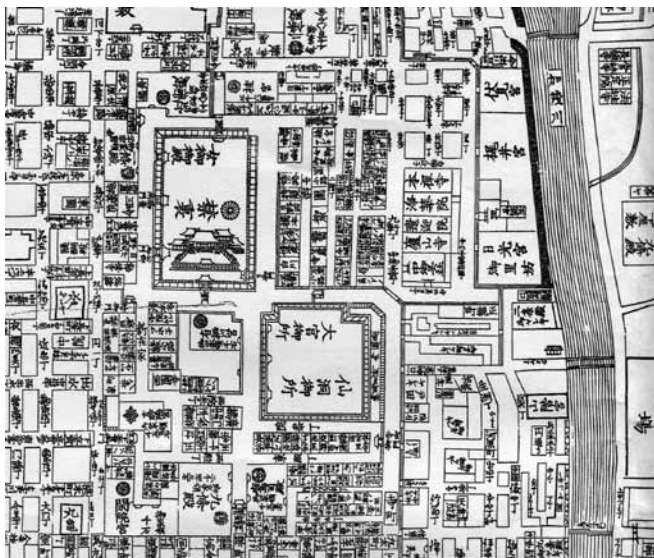
してもこの上ない地域であった。そしてなお良いことには、歩いてすぐ行ける距離に下鴨神社や寺町の寺院、そしてすぐ西には京都御苑も広がっているのである。

散歩と思索の毎日であったが、大正七年ごろのある日、今出川通りの東、東大路角の百万遍知恩寺あたりを政夫人とともに散歩していた。すると知恩寺本堂から朝の勤行の念仏と木魚の音が聞こえてくる。それは本山第六十六世の中島観琇大僧正自らの念仏であった。玄洞は、回向後に下ってきた中島師を呼び止めて話をし、さらに、功名と財を得た自分にとって世間に向かつて報いることのできる道は何かと問うたという。すると中島師は、自分にはこうすべきであるとは申し上げられない、その方はただ百万遍のご本尊にお伺いなされ、と答えた。それ以来玄洞は頻繁に百万遍知恩寺に詣でてご本尊にその道を問ひ、ようやく、寄進の方向を定めたとされる（林靈法「山口玄洞居士を偲びて」『仰景帖』昭和六一年）。そして知恩寺の寺務所に在った福住周学師とともに称名念仏の道に入り、仏道の徒として進んでいくこととなったのである。それは大正八年頃のことであった。そして早くも大正十一年一月には知恩寺境内の東側に念仏道場を開き光明会に資するための修道院を設立して本堂を建築し一四年には修繕費を寄進している。修道院の扁額は賀茂禪

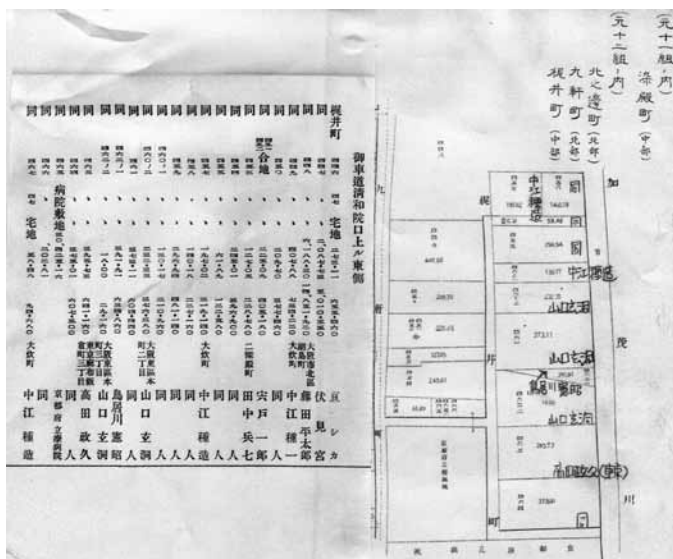
房西阿の筆とされる。

光明会は信仰の生活のうちでとくに念仏の実践を説いたもので大正三年に山崎弁栄が「如来光明会趣意書」を発表して光明主義が広く流布しはじめた（『浄土宗布教伝道史』浄土宗宗務庁一九九三年 1886, 1906）。そして玄洞が支援したこの光明会については、一〇歳年下の第四代藤井善助も熱心な信者であった。善助は昭和六年に五個荘の本宅で光明主義の法話会を開催し翌年には京都滋賀で光明会法話会を開いており、さらには全国司法保護事業連盟評議員としてともに活動もしている（『第四代藤井善助略年譜』『藤井善助と有鄰館』近江商人博物館 289, 1, F. 11。また同書に善助が主宰した江州光明会の写真も載る）。さらに善助の弟で光明会全国聯合会評議員も務めていた藤井彦四郎も、昭和一八年の善助長逝ののち光明会全国聯合会の法人申請をおこなう理事長に就任している（『藤井彦四郎傳』同編纂委員会 282, 1, F. 11）。こうしたことからこの山口玄洞と藤井善助・藤井彦四郎との間の、信仰上のまた社会貢献の面での関わり合いが推測され興味をひかれる。

さて念仏に励むとはいっても玄洞の場合は、ある特定の宗派に偏するというのではなく、ただ仏道の本義を究めようと励んだのであった。というのもその後玄洞は、大徳寺僧堂において雲水の指導に当たっていた昭隱和尚



御車通周辺（「改正京町御繪圖細見大成」慶應4年再刻『新修京都叢書 第23巻 古地図集』より、部分 216.2/S7/23）



『京都地籍図』（京都地籍図編纂所 大正元年）の復刻版（不二出版 2008年 291.62/kyo/1）から山口邸周辺御車通の地籍図と附録の表とを筆者が合わせて補記したもの。

(川島昭隱)に就いて禅道にも励むこととなるからである。そして請われて大正七年臨済宗大本山方広寺派管長に就いた間宮英宗和尚とも相知るようになり、ますます念仏と禅の教えに励むようになる。

大正九(一九二〇)年になり玄洞は、近江坂本の飯室谷長寿院にこもって念仏をおさめ、翌年にはその南に松禅院の復興をした。この松禅院の再興については次のようないきさつがある。玄洞は当初西教寺総門前の安養院を借りて念仏修業に励んでいた。ある日京阪電車で坂本駅を降り歩いて西教寺に向かう途上、戒光院の門前に「類焼地藏尊」の石標をみつけ、お参りをすることとした。案内を乞うと住職堀恵慶師が在宅でこの地藏尊の来歴を聞いた。そしてその話を聞いた後で、いま西教寺総門前の安養院で修業をしていること、環境が少し騒がしくて他に場所を探していること、など問うた。すると堀恵慶師は、良い場所があると言い西教寺北の飯室不動堂まで登って案内し住職の堀覚道師を紹介した。

堀覚道師は西南戦争の従軍組で、戦争から無事帰還した覚道に妻子が喜んでいる姿をみて、一方で戦死した兵の家族を思い、じっとしておられず家族にも告げず山に登り、比叡山に参籠すべく横川大師堂に棲み込んだ人物である。そして得度を受けて念仏行者となり、さらに恵



百万遍の知恩寺山門。山口玄洞本邸から歩いて15分ぐらいであらうか。2011年12月20日撮影。



大正 11 年玄洞が寄進した知恩寺修道院。扁額は賀茂禅房西阿のもの（『仰景帖』昭和 13 年より）。



知恩寺修道院の現在。扁額は架っていたものの残念ながら現在無住である。2011 年 12 月 20 日撮影。

心堂を再興したのであった。その後堀覚道師は飯室不動堂の堂守りのため下山し、政所と長寿院とを合わせて念仏道場に造作して念仏修業をしていたのであった。そこで玄洞と出会ったのである。玄洞は堀覚道師の人徳に触れて、この飯室に松禅院という道場をあらためて建てることにしたという次第である。大正十一年のことであった（天台座主「山田恵謙「思い出は玄洞翁と比叡山の結びつき」『仰景帖』昭和六一年）。

この玄洞の坂本での修行のいきさつを体感するため、そして、玄洞が寄進した寺院の現在をみるためにわたし自身も坂本から飯室不動堂および松禅院までの道のりを歩いてみることにした。京阪坂本駅で降りた玄洞は、念仏修業に励んでいた西教寺総門前の安養院に向かう途中で、戒光院門前の「頬焼地藏尊」石標をみつけ、そこで案内を乞うてこの地藏尊の由来や、もと妙行院ご本尊であった経緯を知り、また堀恵慶師と出会うことになった。この頬焼地藏尊は、現在は、玄洞が再興したもとの妙行院にもどっており、この石標もいまは妙行院の門前に建てられている。玄洞が初めて堀師と出会った戒光院の建て替えを玄洞が申

し出たとき堀師は、頬焼地藏尊のお寺である妙行院の再建を希望して、妙行院が建ち、地藏尊も元の場所に祀れることとなったのである。

この戒光院で玄洞は堀恵慶師に、現在修業をしている安養院が道路に面していて、少し落ち着かないので他の場所を探している旨を告げると、堀師は、西教寺からさらに北の飯室不動堂に案内し、堀覚道師と会わせた。確かに西教寺総門と安養院の間には幅広い道路が通っていて、当時とて人通りが多かったであろうと予想できる。



妙行院門前にもどった頬焼地藏尊の石標。玄洞は坂本駅から西教寺に向かう途上の戒光院にあったこの石標を見つけてその由来を尋ねたのだった。2012年1月15日撮影。

ここから玄洞は堀恵慶師に伴われて飯室に登って行ったわけだが、現在でもしばらく住宅地を歩くとすぐに山道となり人家はなくなる。いまは細いながらも車のかろうじて通行できる道路があるが、当時は、山を越えて飯室に出たのであろう。途中に松禪院に到る山道が2本あった。一本は飯室谷回峯行者の通る奈良坂と、この堀覚道師が大正時代に開いたという覚道坂とである（竹内康之『比叡山一〇〇〇年の道を歩く』二〇〇六年ナカニシヤ出版20161/Tak）。この道を堀恵慶師とともに玄洞のはぼって堀覚道師に会いに行つたに違いない。

わたしが訪れた日は冬場でこの覚道坂を行く人もなくわたしは情けなくも西教寺から続く細い車道を歩いたのだが四、五〇分ほど行くと飯室谷不動堂に出た。玄洞が飯室に登ったときには堀覚道師は輪番が欠員となつていた飯室不動堂の堂守りとして念仏修業をしていたわけだが、この飯室の地の環境を好ましく思った玄洞は、大正一一年には長く廃絶していた松禪院を長壽院の南の地に再興して、護摩堂（稱禪院年表）には本堂とある）を修理し、庫裡を建て、長壽院の不動堂の屋根修理を行つた（『仰景帖』一一一頁昭和一三年）。大正一二年には松禪院に観音堂を建てて石造観音立像を奉納している。この観音立像の裏面には、「願以此功德普及於一切／我等與衆生皆共成



｜ 再建された妙行院の境内。2012年1月15日撮影。





玄洞が頬焼地藏尊の石標をみつけ堀師と出会った戒光院。2012年1月15日撮影。



道路側から見た安養院（右）と西教寺総門（左）。2012年1月15日撮影。

佛道／大正一二年六月吉祥日建之／施主山口玄洞／松禪院住職大僧都覺道代／請負人松井源次郎／南勢友作」と刻まれている。そして大正一四年には地藏堂、大黒堂および土蔵も建立したのであった。

さてこうして玄洞は、飯室谷長寿院にこもって念仏をおさめ、また松禪院を再興してますます修業に励んだ。ところで、飯室不動堂や比叡山横川所屬の住職たちは、毎月三日には比叡山中興の祖である元三大師を祀る横川大師堂に詣でることになっていたわけだが、その坂本の里住まいから比叡の山に登るときこの飯室不動堂に立ち寄り休息をとるのが常であった。そこでは玄洞が修業をしているわけで、玄洞はここでこれら学徳を備えた僧正である今出川円俊師、水尾寂暁師、渋谷慈鎧師らと出会うこととなり、横川が絶好の修業道場であるとの認識を玄洞は持った。そして法華経を筆写する如法経会がすたれていることを嘆き、荒れ果てた横川の如法堂址に根本如法塔を再興して大正一一年横川如法経会を設立して写経の会を再開せしめたのであった。この如法塔の場所を定めるのに先の元三大師の御籤で定めたのだったが、工事に取り掛かると地中から一条天皇の中宮で道長の娘彰子奉納の経篋が出現し、ここがもとの如法塔の場所と分かってその因縁に驚いたという。こうして如法塔が再興



飯室不動堂および松禪院に登る覺道坂。2012年1月15日撮影。



｜ 飯室松禅院護摩堂と庫裡。2012年1月15日撮影。



｜ 地藏堂から望む松禅院全景。2012年1月15日撮影。

され如法会が再開されることとなった。この如法写経会が行われる如法塔には、慈覚大師の影像の前に称禪院玄阿輝洞居士の玄洞位牌が置かれて祀られているという。このようにして比叡山と玄洞との結びつきが強くなっていき、玄洞死去の昭和一二年には、玄洞最後の寄進として東塔阿弥陀堂が建立され、玄洞死後の五月に落慶法要がもたれたのである。

こうした念仏と参禅の甲斐あつてか、体調もどつてきて、玄洞は方広寺派管長間宮英宗和尚への感謝の念を示すために大正一一年遠州深奥山方広寺に三重塔を寄進することとした。そしてその前年大正一〇（一九二一）年には京都寺町に山口仏教会館を建造し、基金を添えて栖賢寺の間宮英宗和尚を館長に迎えた。和尚はこの会館を拠点にさらなる活動を繰り広げることとなる。この山口仏教会館は、戦後には文化会館として使用され、その跡地には、昭和五七年京都市歴史資料館が建設されることとなった。このいきさつは、森谷尅久によれば次のとおりである。森谷が玄洞の子息第五代玄洞と会ったのは昭和四三年ごろ、当時岡崎にあった京都市史編纂所においてであるという。森谷が右京区牛ヶ瀬の津田家の調査をしていたところ、津田家の出身という五代玄洞が訪ねてきてこの津田家の由緒について法要の折に話をしてほ

しいと依頼された。そしてこの市史編纂所は改組されて林屋辰三郎の責任編集のもと『京都の歴史』の刊行準備にはいり、さらに京都歴史館との仮称で資料館構想も出されていた。そんな昭和四六年の一〇月一日、林屋から、五代玄洞より市史編纂所建設のための敷地寄贈の申し出があつたと告げられた。その土地は、先の山口仏教会館であつた。そして五代玄洞は、京都に歴史資料館がないこと、さらに山口仏教会館の実情を考えたとき、資料館として建て直すことが、先代玄洞の遺志を継ぐことになると語つたとされる。そして財団法人山口仏教会館を解散して昭和四八年五月二五日、京都會館において目録贈呈式が行われたというわけである（森谷尅久「四代山口玄洞翁と京都市歴史資料館」『仰景帖』昭和六一年）。この資料館の前には大徳寺管長中村祖順老師の揮毫「山口仏教会館跡」の石碑が建つ。この山口仏教会館も、山口玄洞邸宅と同様に武田五一の設計になる建物である。

このようにして念仏に励む玄洞は、山口式念仏法と言えるものを考え出した（中野梵溪『稱禪院略傳』）。毎朝三時に起床し店員を本堂に並べせ丹田に力を入れて座り、膝を少し開いた状態で大きな声を出して称名する。この数時間におよぶ念仏のあとには南無大慈大悲十一面觀世音菩薩ほか五尊の名と尊ごとに心経六卷ずつ読誦するとい

う大変なものであった。

昭和四年ごろから玄洞は毎年正月を、坂本安養院で念仏修業に励んで過ごした。伊賀上野市西蓮寺住職金剛義光がまだ坂本の安養院に在住の時の回想によれば、正月元旦の祝儀を京都の邸宅で済ませてすぐに、森下という付添いの古老と二、三人の店員とともに、寺に向いて泊りがけで木魚を叩いて念仏を唱えた。太くて洪い声で、長年の修業鍛えた見事な念仏であったという（富豪の膏葉」、筆者未見、参照は『山口玄八十年史』）。

この念仏修業が人格を形成しそれが仕事に繋がると信じた玄洞は、新社社員二〇名を毎年坂本安養院と御車通の本邸に集めこの念仏をとこなえる修行を行かせたという。会社の仕事からは離れて京都に籠もった玄洞は、厳しい修業を自身に課し、社員にもこうした精神的内面的な指導を行っていたわけである。

その玄洞は昭和四年一月二十九日店を訪れて講話を行っているのだが、これが会社の、そして社員に対するいわば遺訓とでもいうべきものとなった（速記岩室憲六郎による「遺訓」は『山口玄八十年史』に載る。岩室は『禅苑』を編集しており同誌に掲載されていると推測するが筆者未見）。

こうして玄洞は自らの心身を称名念仏と禅道という仏道に投入しながら、一方で私財を寺社や施設への寄付と



京都寺町山口仏教会館。本邸同様武田五一の設計である（『山口玄八十年史』より）。現在は京都市歴史資料館。



武田五一胸像（京都工芸繊維大学構内 2012年1月20日撮影）。

いう形で社会へと還流させたのであった。玄洞は御車通本邸の陽当たりのよい居間に寝起きし、富岡鉄斎の写真を掲げ、さまざまな仏像を安置して持仏とし、毎朝三時からの勤行を怠ることはなかった。

昭和十一年一〇月二五日、玄洞の寄進した知恩寺大方便が竣工して別時念仏会が開かれ、玄洞は講話を頼まれ出かけて「鎮西上人の徹選択集を拝読して」と題した講話をおこなった。その後持病として抱えていた糖尿病に腎臓病を併発してしまい、一二月六日あたりからベッド

に寝つくようになり二一日からは病床に就くというありさまとなった。二五日には大阪帝国大学楠本長三郎総長が見舞いにきた。また尾道市役所からも柑橘が届き「うまいな」と喜んだという。二六日には見舞いに訪れた水尾寂暁師に二十五菩薩来迎図を枕元にかけてさせるまでの重篤となった。衰弱しながらも高尾神護寺金堂に植え込む楓を窓外に吊させて見分したり、安井樗次郎技師には昭和一〇年一二月に寄進した比叡山阿弥陀堂と工事中の政所に使う瓦見本を持ってこさせたりもした。

それでも何とか小康状態となり正月を迎えてお餅の汁をすすって元旦を祝うことが出来た。年賀にきていた家族や会社の重役、社員らを枕元に呼んで、自己本位ではうまくいかないこと、自己を捨てることで自己を向上させること、これが成功の基本であると言ひ含めた。そして昏睡状態になりまた時おり目を覚ますと念仏を唱え、閻天上人の『夢の知識』（教報社 明治三十七年1886/Kan）の臨終の心得を読誦させた。ここに「一、正しく只今命終ト思フ時ハ彌々家内ヲ寂靜ニシテ、知識タル人病人ノ前ニテ靜ニ曰ベシ、年来ノ本望此時ナリ、如來ココニ引接シ玉フ、決定往生疑ヒナシ、南無阿彌陀佛十返百返



梶井町御車通の山口本邸表玄関前（『仰景帖』昭和13年より）。

千返病人ノ耳ニヲツル程、ヲソカラズ、ハヤカラズ、病人ノ出ス息ニ唱ヘ合スベシ」「一、又ノ言ハク、兎ニモ角ニモ惡ヲ忍ビテ念佛ノ功ヲ積ベキ也、習ヒ先ヨリ有ラザレバ、臨終正念モ難シ、常ニ臨終ノ思ヲナシテ臥ス毎ト二十念ヲ唱フベシ、サレバイ子テモ覚テモ忘ル、事ナカレト侍ルノ阿彌陀佛と十聲唱へてまゝ永きねむりとなりもこそすれノ夢の世はとまれかくまれ嘆くなよ覚めて臺に登り身なれば」と出ている。こうした臨終の心得を讀誦させるなか、玄洞は往生したのである。時に昭和一二年一月九日午後六時二三分のことであった（山口三郎「病間追想」『山口玄八十年史』）。

密葬は一月一一日本邸大広間で行われた。導師は山口仏教会館長間宮英宗大禪師である。なお本葬は一月一七日に大徳寺で執り行われている。会社関係、宗教関係者、寄付寄贈を受けた寺社や施設の関係者らが参列する盛大なものとなった。禪宗で靈前に供える奠茶奠湯は玄洞が多大な寄付をして建設した尾道上水道の水をもっておこなわれた。また尾道では密葬当日には浄泉寺に焼香台が設けられ市民の参拝がなされ、本葬時には西国寺で追悼法要が営まれて玄洞の遺徳が偲ばれている。納骨は昭和一二年二月二六日大徳寺塔頭龍翔寺内山口家墓地でおこなわれ、また四月二十五日には尾道西国寺の墓所に

分骨された。法号は稱禪院玄阿輝洞居士である。

#### IV・寄付・寄進

玄洞が社会貢献に生きた大正時代から昭和のはじめは、慈善事業家が多く出た時期であった。たとえば『日本の企業家と社会文化事業―大正期のフィランソपी―』（川添登・山岡義典編著 東洋経済新報社 一九八七年 303頁以下）には、森村市左衛門と森村豊明会、原田二郎と原田積善会、斎藤善右衛門と斎藤報恩会、大原孫三郎と大原三研究所などが取り上げられているが、こうした慈善家と山口玄洞はすこし性格を異にしている。それが仏道と

いう宗教的な動機に根差したものであり、信仰のための施設を整備することにより仏道を目指すといった間接的な寄進であるということにも関連しているかとも思う。つまり山口のそれは社会事業そのものというわけではなく、どう言えばいいか、何か人知れずというか、名を冠することのない寄進であったということがあるのかもしれない。

ここで思い起こすのは、同じく大正時代から昭和初期に、京都西陣の帯地卸商で財をなした三宅安兵衛のことである。安兵衛は、遺

した資金をもってお世話になった京都の町に何らかの形で還元してお礼とするように、と言い遺して死去した。そしてその子清治郎が、京都府南部の文化史蹟を中心に、その存在を示す石碑を建てることとしたというものである。石碑を建てるというあまり目立たぬ社会還元のあるが、石碑の裏には「京都三宅安兵衛依遺志建之」とあり、それが三宅安兵衛の遺志であることが明記されており、その遺志は形あるものとして遺されることとなった。清治郎による父母の回想記『木の下蔭』には、「此の金を予が死後、京都の為め公利公益の事に使用せよ。是れ予



| 関通上人『夢の知識』表紙 (188.6/Kan)



# 山口玄洞氏葬儀

九日葬式した玄洞氏葬儀、山口玄洞氏の葬儀は十七日正午、北大路大徳寺法堂で執り行

喪主三郎氏並に親族衆、通経各寺院僧衆、山内寺院の出頭に次いで山内、南外、四蓮、南入堂、美敷、故あり、唯、築道長、菊池三三、庄、藤澤、寺岡、在郷軍人後援會、長瀬、酒井、野外、十、数氏の用、辭、謝、書あり、各、及、前、から、の、用、電、白、録、通、の、披露、五、演、講、の、念、誦、喪、主、並、に、一、門、の、檀、香、連、同、出、頭、寺、院、關、東、各、寺、院、僧、侶、の、檀、香、あり、同、二、時、から、一、般、檀、香、に移り、相、燈、大、飯、詰、工、會、協、所、會、頭、飯、大、植、本、博、長、久、野、助、多、助、住、友、澤、池、幸、の、財、界、知、名、工、を、始、め、竹、内、橋、風、堂、本、印、傳、善、伯、等、京、數、神、知、名、十、相、次、友、人、の、德、を、傳、へ、し、め、一、般、檀、香、者、約、三、千、人、で、盛、儀、を、極、め、た、(「眞、實、は、相、次、一、般、檀、香、也」)



京都日出新聞 昭和12年1月10日 山口玄洞葬儀の記事（京都府立総合資料館所蔵マイクロフィルム）

が幼より故国を出て京都に來り今日迄恩沢を蒙りし御礼の意也。但し其用途の方法時期等は汝に一任す」とあり、清治郎は熟慮の末に寺社や名所旧蹟を示す石碑を建ててることを思いついたという（中村武生「京都三宅安兵衛・清治郎父子建立碑とその分布―大正期及び現京都市域を中心に」『花園史学』第三二号二〇〇一など）。この安兵衛・清治郎による石碑については、中村武生がその全貌を明らかにしようとする力と力を注いでおられるところである（「京都三宅安兵衛遺志碑とは？」<http://homepage2.nifty.com/NakamuraTakeo-HP/yasu/index.html> 二〇二二年一月二〇日アクセス）。

振り返って山口玄洞の寄付・寄進については如何であるるか。『仰景帖』（昭和一三年）の巻末に中野楚溪編「稱禪院年表」がありそこに寄付・寄進の概要が掲載されている。それは百か所以上にのぼり、またその資金面から考えても、気の遠くなるような膨大さである。これら玄洞の社会貢献については、どこかで顕彰され、また寄付寄進の経緯が、該当の寺院の案内板や由緒書などに明記されているのだろうか。先に少し述べたように、それは玄洞の望むところではないかもしれない。尾道市の上水道敷設費として一〇三万五千円を寄付した玄洞の銅像を尾道市で建設しようと申し出たところ断った玄洞のことである（「玄洞同窓会相談役高橋徳次郎氏挨拶」『山口玄八十年史』）。

また神護寺に寄進するときには京都の新聞社の記者を食事によびながら、この寄進についての記事は一切書かぬように挨拶をしたともいう（別格本山高尾神護寺貫主谷内乾岳「玄洞居士を偲んで」『仰景帖』昭和六一年）。しかしながら玄洞の死後七〇年以上も経過した現在にあって、それらは忘れられてよいというものでもあるまいと思う。玄洞が寄進した堂塔について、その寄進の次第がかならずしも記されているわけではないのだ。

大正七年に京都の御車通の本邸に身を引いた玄洞は、ひたすらに信仰の道に入り、社会還元の慈善事業という直截的な支援もおこないはしたが、それよりもむしろ仏道のための祈りの場所である寺院伽藍を整備すること、そのことで人として祈りの心を取り戻す環境が整うのではないかと考えて、間接的な形で寺社の整備への寄付寄進を行っていった。その金額は莫大なものとなった。こうした玄洞の寄進の行為が知れてくると、いたるところから寄進嘆願の声が寄せられる。しかしながら玄洞は寄進する寺院については、寺の由緒、景勝地にあること、住職の人格の三条件を満たすものを厳選した。条件が整った寺院には玄洞の方から進んで寄進した。それは玄洞の寄進という行為が、代償を求めるものではなく仏道に根差した無償の行いであるということを意味している。し

かしながら無償の行為であるにしても、また無償の行為であるからこそ、死後七〇年を経過した現在、あらためてその顕彰がなされてもよいのではないかとも思う。

さいごに玄洞の寺院寄進の設計を受け持った安井檣次郎のことに触れておく。玄洞の御車通の本邸や山口仏教会館は武田五一の設計であったが、玄洞寄進の寺院堂塔の多くの設計は安井檣次郎が携わっている。安井檣次郎は明治六年の生まれで玄洞の一〇歳ほど年下であった。京都府の技手として醍醐寺薬師堂などの修理工事などにあたり、大正一一年ごろから玄洞の専任技師のかたちで玄洞寄進した寺院などの設計を手掛けてきた（廣岡幸義「安井檣次郎と山口玄洞」『平成一七年度日本建築学会近畿支部研究報告集』）。そして玄洞死去の病床の時期まで、玄洞の指示に従ってその任を果たしてきた。

このように安井と二人三脚で寄進がなされてきたわけだが、今回そのいくつかその寄進の個所をわたし自身で歩いた。玄洞の社会還元とも言える寄進がどのようなものであったか、その寄進の旨が寺社などにおいて何かの形で明示されているものなのであろうか、それがどの地域のどういった箇所であらうか、こうしたことをその場所を実際にいくつかを歩くことで、昭和十二年一月に御車通の本邸で息を引き取った玄洞の軌跡を、少しでも追



「猿丸大夫故址」の石碑裏面。「昭和三年秋稟京都三宅安兵衛建之」とある。  
2012年1月22日撮影。

体験できればと考えて、今回は数箇所だけでも歩いてみたいと考えたのである。現場に立つことで場所の持つ磁場とでもいえるべき力を感じることが出来るやもしれぬと思っただけである。そしてその巡覧を加えて本稿を記してきた。

文末にそうした巡覧のためにはと思い、中野楚溪編の略年表（『仰景帖』昭和一三年）から地域ごとの寄進リスト作成して掲げておいた。

## むすび

ここまで、いささか長い論述となってしまったが、山



猿丸神社内の三宅安兵衛・清治郎による石碑「猿丸大夫故址」。  
2012年1月22日撮影。

口玄洞の事績を追いながら、とりわけ寺院や施設などへの寄進について、その実施にいたるまでの玄洞の軌跡を述べてきた。はじめに書いたように、それは、梶井町御車通の聖トマス学院を訪れてから、その場所の持つ力でも言うべきもの触発され、それに引かれるようにして前住者の玄洞のことを調べるにいたった。玄洞は会社を引退してのち、この梶井町の本邸を住処として京都の町を歩き、寺院を詣で、仏者と出会い、称名念仏や禅道へと向かう方向性を定めることとなった。玄洞はここで晩年を過ごし、念仏に励みながら寄付寄進をおこなう寺院や学校などを定めここで生涯を終えた。御車通の本邸はまさにその場所だった。玄洞は息を引き取る直前まで、寄進をした寺院の植樹などにも心をいためながら、その臨終には菩薩来迎図を枕元にかけて念仏を唱え、「夢の知識」を読誦させながらこの本邸で息を引き取った。

そしてあとに残ったのは、私財をなげうって各地に寄進をした寺院の伽藍や文化施設である。寄進した文化施設のいくつかは、すでに建て替えがなされて往時をしのぶことはできないが、寺院の多くは、玄洞の仏道への思いを身に纏いながら、その姿を我々の前に見せてくれている。寺社の建物には、そのひとつひとつに玄洞寄進の経緯などが記されているわけではないのだが、そこに残

されて在る建物には、寄進にいたる玄洞の深い思いが込められているはずである。

ことさらに玄洞の功績を顕彰するというのは、もとより山口玄洞の望むところではあるまいが、玄洞死して七〇年を経た現在、もういちど玄洞の心の軌跡を追いながら、その寺院の伽藍などを眺めてみることもあながち意義のないことでもあるまいと考えて、玄洞の軌跡を論じてみた次第である。

### 〈附録〉

#### 一、山口玄洞寄贈寄進一覧

このリストは中野楚溪編の年表から、寄付寄進を地域ごとに書きだしてまとめたものである。巡覧するためのリストとして作成したものであり、寄付寄進の金額については割愛した。詳細は楚溪の年表（『仰景帖』昭和一三年）を参照されたい。また楚溪のリストは年月順であるがここでは、寺社や学校などの種別とし、それを県ごとにまとめた。ただ尾道は類別せずまとめてある。数が多い京都や滋賀の寺社は五十音順に並べ替えた。

#### 〈尾道〉

尾道市女子高等小学校に寄付 明治三四年五月

\*二四年ぶりの帰郷時に寄付。

尾道市西国寺に井戸屋形を寄進 明治三四年六月

尾道市実業補習学校設置ならびに経営基金として醸出 大正八年七月

年七月

\*大正八年八月設立認可、翌九年四月尾道市立実業補習学校開校、昭和一〇年尾道市立明德商業学校。現広島県尾道南高等学校。

尾道市上水道敷設費として寄付 大正一一年六月

尾道商業実務学校基本財産として寄付 大正一一年七月

尾道市浄土寺十一面観音尊前に青銅大燈籠を奉納 大正一三年

\*尾道を出て大阪に向かうときに燈籠寄進を誓願し、その約束を果たしたものの。

尾道市久保八幡神社に寄進 昭和六年六月

〈小中高等学校〉

大阪市船場小学校の新築にあたって寄付 明治三五年九月

京都下鴨尋常高等小学校校舎増築費中に寄付 大正一五年五月

京都京極幼稚園改築費中に寄付 昭和三年九月

京都府立第一高等女学校図書館に寄付 昭和三年一二月

大津市膳所町小学校に寄付 昭和三年一二月

京都府立第一中学校図書館に寄付 昭和四年一〇月

大津市膳所小学校建築費中へ寄付 昭和六年四月

京都家政高等女学校建築費中に寄付 昭和九年四月

〈大学〉

早稲田大学基金中に寄付 明治四三年五月

早稲田大学御大典記念基金中に寄付 大正四年一二月

大谷派女子学校へ寄付 明治四四年一月

日本女子大学基金中に寄付 明治四四年六月

日本女子大学へ寄付 大正五年六月

慶應義塾大学医学科設立資金中に寄付 大正五年一月

京都帝国大学山口奨学資金として寄付 大正九年一月

大阪帝国大学微生物病研究所のために醸出 昭和六四年

\*昭和八年七月大阪府立医科大学附属病院横に建設し大学に寄付

大阪帝国大学微生物病研究会へ寄付 昭和八年一二月

〈団体〉

帝国義勇艦隊建設義金として寄付 明治四〇年五月

日本赤十字社へ醸出 明治年月明治四一年四月

恩賜財団済生会に寄付 明治四四年六月、大正一五年五月、昭和三年五月

和三年五月

\*明治四四年五月三〇日設立認可。

同仁会に寄付 大正五年一月

大阪市財団法人山口厚生病院設立資金として醸出 大正七年六月

\*大正一二年一〇月開院式。管理を当時の大阪府立医科大学に依頼。医科大学が大阪帝国大学医学部となり財団法人を解散し昭和一〇年九月大阪帝国大学本学に移管され附属医院山口病院

京都光明会に寄進 大正一二年

\*熱心な念仏者の両親を持つ山崎弁栄が開いたもので大正三年「如来光明会趣意書」を発表した（『浄土宗布教伝道史』）。

広島県片山病撲滅組合に寄付 大正一三年一二月

\*片山病は小さな巻貝が仲介する住血吸虫が原因の地方病。大正七年広島県地方病撲滅組合組織。

京都岩倉病院に寄付 大正一三年一二月

\*明治一七年私立岩倉癲狂院、明治三八年私立岩倉病院。

京都北野会事業費へ寄進 大正一四年一月

京都の大礼奉祝事業中に寄付 昭和三年七月

兵庫県垂水町巡查部長派出所建築に寄付 昭和五年三月

社団法人帝国軍人後援会に寄付 昭和六年四月

和気会に寄進 昭和七年七月

京都府聯合保護会に寄付 昭和九年四月

〈震災火災への義捐金〉

米価高騰に際して大阪市へ寄付 大正七年  
米価高騰に際して京都市へ寄付 大正七年

兵庫県ほか二県の暴風雨罹災者に寄付 大正七年九月

関東大震災火災救援費として寄付 大正一二年九月

丹後但馬地方の震災義捐金として醸出 大正一四年六月

奥丹後震災義捐金として寄付 昭和二年三月

北海道函館火災義捐金として寄付 昭和九年三月

〈京都 寺社・史蹟等〉

愛宕念仏寺地藏堂寄進建立 大正一五年九月

今宮神社高麗犬一对寄進 大正一五年四月

岩倉の岩倉公旧蹟保存会に寄付 昭和三年三月

大原古知谷阿弥陀寺書院二棟、山門建築および造庭 昭和三年九月

上高野栖賢寺建築および造庭ならびに敷地を寄進 昭和四年一月

二月

京都山口仏教会館設立費および基金を醸出 大正一三年七月

黒谷金戒光明寺再建費中に寄進 昭和九年一月

黒谷公安院表門新築 昭和四年一月

嵯峨永明院本堂を新築 昭和四年四月

青蓮院茶席を修繕 昭和四年六月

青蓮院隠寮および廊下新築 昭和七年一二月

神護寺金堂および多宝塔、茶室を新築 昭和七年一二月

醍醐三寶院客殿および道路修繕 昭和二年九月

醍醐寺大伝法院本堂建築および造庭一切を寄進 昭和三年七月

\* 一切とは、大講堂・弁天堂・不動堂・鐘樓・阿闍梨寮・総門・

学寮・地藏堂・伝法院本館の九棟という。昭和五年四月の

醍醐天皇一千年御忌大法要が開かれたが玄洞はその御忌奉讀

会総裁をつとめた（八〇年史）。

大徳寺禅堂隠寮および茶席新築を寄進 大正四年五月

大徳寺山内総見院維持基金として寄付 大正一五年五月

大徳寺山内総見院庫裡修繕 大正一五年一二月

大徳寺山内総見院唐門および本堂屋根修繕、浴室便所の新築

昭和一〇年三月

大徳寺山内興臨院本堂を修理 昭和二年三月

大徳寺山内興臨院維持基金として寄進 昭和二年二月、昭和二

年六月

大徳寺山内大慈院本堂修理および茶席移建寄進 昭和二年五月

大徳寺山内龍翔寺維持基金として寄進 昭和二年一二月、昭和

五年六月

大徳寺山内龍翔寺本堂その他一切新築を寄進 大正一一年

大徳寺山内三玄院修繕 昭和三年四月

大徳寺正受院維持基金として寄進 昭和二年六月

大徳寺正受院観音堂および茶席新築 昭和二年八月

大徳寺本坊防火栓設備費を寄進 昭和三年五月

大徳寺開山遠忌に寄進 昭和七年五月

知恩院防火設備に寄付 昭和三年六月

東寺銅燈籠新設および境内植樹をなす 昭和九年四月

東福寺法堂再建費中に寄進 昭和八年九月

東福寺遠諱につき寄付 昭和九年三月

豊国神社再興五十年祭として寄付 大正一四年七月

梨木神社へ石造端垣を寄進 大正元年一〇月

梨木神社五十年祭事業中に寄付 昭和一〇年五月

南禅寺山内法皇寺本堂新築 昭和二年三月

西山善峰寺興隆会に寄付 大正一五年四月、昭和二年三月、昭

和三年三月

幡枝圓通寺観音堂建築費中に寄進 大正一四年二月

花園転法輪寺本堂建築および敷地全部を寄進 大正一四年三月

百万遍修道院本堂を寄進 大正一一年 本山の直轄地

百万遍修道院各所修繕費一切を寄進 大正一四年四月

百万遍修道院維持基金として寄付 大正一四年一〇月

百万遍知恩寺廊下、表門移転および石垣増築等寄進 昭和三年

五月

百万遍大方丈、唐門の新築 昭和九年一二月

柳谷寺奥の院再建費中に寄進 昭和三年九月

山科毘沙門堂隠寮、廊下、弁天堂を新築および築庭 昭和四年

八月

山科毘沙門堂浴室を寄進 昭和十一年二月

山科勸修寺大悲閣、弁天堂、茶室を新築 昭和六年六月

〈滋賀〉

飯室松禪院本堂改築、庫裡新築、不動堂修理 大正十一年

飯室松禪院に観音石像を寄進 大正十二年

飯室松禪院維持基金として寄進 大正十四年九月

飯室松禪地蔵堂、大黒堂、土蔵新築、本堂増築 大正十四年一

〇月

石山寺本尊開扉大法会費中および食堂再建費中に寄進 昭和二

年五月

坂本西教寺振隆基金として寄進 大正十五年三月

坂本西教寺別時大念仏基金として寄付 大正十五年三月

坂本西教寺隠寮新築を寄進 昭和五年四月

坂本西教寺専門學寮講堂食堂を新築 昭和十一年九月

坂本禪定院本堂、庫裡新築ならびに庭園等寄進造立 大正一五

年一二月

坂本安養院を新築 昭和十二年一二月

坂本東南院に石造地蔵尊を建立 昭和七年九月

坂本妙行院に敷地ならびに伽藍一切を寄進 昭和十一年二月

膳所専故庵地蔵尊を建立 昭和五年一二月

高島大清寺地蔵尊別時念仏維持基金を寄進 大正十三年一〇月

高島大清寺念仏講維持基金および費用を寄進 大正十四年九月

比叡山横川中堂如法会基本金として寄進 大正十二年一〇月、

昭和三年三月

比叡山横川恵心堂庫裡建築、大師堂修理、中堂政所移転改築

を寄進 大正十三年

比叡山横川恵心堂屋根替えおよび増築費を寄進 大正十四年九

月

比叡山横川多宝塔を寄進建立、中堂前に観音銅像を奉納 大正

十三年

比叡山横川元三大師堂の屋根替（堂葺）をおこなう 昭和九年

六月

比叡山法曼院本堂新築費中に寄進 昭和八年七月

比叡山阿弥陀堂および政所の建立 昭和十一年一二月

〈奈良〉

吉野如意輪寺須弥壇寄進 大正一五一一

〈兵庫〉

淡路蓮花寺に寄付 昭和十一年一二月

〈和歌山〉



根来寺に寄進 昭和三年四月

四月

〈三重〉

引接寺維持基金に寄進 昭和四年三月

〈岡山〉

本山寺に銅製観音像を寄進 昭和七年一月

〈東京寺社〉

明治神宮造営費中へ寄付 大正五年一月

〈福岡〉

大生寺に青銅製観音像を建立 昭和五年六月

博多崇福寺銅製観音像および台石を寄進 昭和六年四月

〈富山〉

伏木光明会念仏道場の新築 昭和九年一月

〈熊本〉

見性寺に銅製観音像を寄進 昭和七年一月

〈岐阜〉

伊深正眼寺に聖侍寮一棟を寄進 大正一〇年七月

〈台湾〉

臨濟禪寺銅製観音像建立 昭和二年一月

伊深正眼寺に銅製観音像を寄進建立 昭和四年九月

〈静岡〉

奥山方広寺三重塔、客殿を寄進建立 大正一一年九月

二、山口玄洞関連文献解題  
図書

奥山方広寺如法会基金として寄進 大正一四年九月

中野楚溪編『稱禪院略傳』京都 山口家文庫 昭和一三年一月

289.1/Sho

〈広島〉

仏通寺多宝塔、禅堂新築、観音像建立、本堂の修理 昭和二年

和装本。昭和二年一月九日に死去した玄洞の一回忌法要のために  
五代山口玄洞（三郎）はこの『略伝』と次の『仰景帖』を刊行した。

『略伝』には、その見返しに父親の愛情あふれる書翰の一部が載る。題號は神護寺住職谷内清嚴僧正、序文は方広寺派前管長間宮英宗禪師、口絵に稱禪院の近影や筆跡「無量壽」などあり、中野楚溪「稱禪院略伝」、岩室憲六郎速記の「稱禪院講演」、山口三郎「病間追想」、中野楚溪「稱禪院年表」、山口三郎「跋文」が収められるが、この構成をもとに昭和二年『仰景帖』が刊行された。以後の玄洞の伝記事項については、この楚溪の略伝が基礎になっている。

中野楚溪編『仰景帖』京都 山口家文庫 昭和二年一月

185/Gok

略伝とともに玄洞の一回忌法要のために刊行したもの。玄洞死後の昭和二年三月、山口家嫡子三郎（五代玄洞）から、技師安井槽次郎をして玄洞建立の堂塔の写真を撮影して図録を編纂するようにとの依頼を中野楚溪が受けて刊行したもので、昭和十三年一月の一周忌に間に合わせて刊行した（「稱禪院略傳」）。全般にわたって中野楚溪が編集にあたった。内容は、稱禪院画像（板倉星光筆）、玄洞居士近影、間宮英宗の序、題字は、臨濟宗方広寺派前管長間宮英宗、毘沙門堂前門跡故菊岡義衷、古義真言宗醍醐派管長佐伯惠眼、古義真言宗神護寺住職谷内清嚴、天台宗座主梅谷孝永、善光寺大勧進水尾寂暁、臨濟宗佛通寺派管長山崎益洲、浄土宗百万遍法主桑田寛階、臨濟宗大徳寺派管長太田常正、臨濟宗方広寺派前管長間宮英宗の序、古義真言宗醍醐派管長佐伯惠眼の序。寄進をした寺院や仏教会館、学校などの図版一七〇枚、それぞれに解説がついている。付録に「稱

禪院略伝 附略年表」「山口家関係図版」が載る。跋文は第五代玄洞である山口三郎。裏表の見返しに父親の書翰の一部が載る。題名は間宮英宗、揮毫は谷内清嚴である。写真図版は昭和二年四月からはじめて一二月まで編者中野楚溪が撮影し作成した。御車通の本邸については表玄関前と全景が載る。

『山口玄八十年史』株式会社山口玄編 大阪 株式会社

山口玄刊 昭和四〇年八月 586.09/Yam

「序」に宮本又次と安岡重明の編集協力とあり、「編集後記」もこの二人が連名で書いている。昭和三六年五月に創業八十周年記念として山口玄洞の伝記執筆を大阪大学微生物研究所教授藤野恒三郎から大阪大学の宮本又次に依頼があり、宮本が、先の中野楚溪『稱禪院略伝』をもとに新資料を加えて執筆したが、社から、八十周年として社史の性格も加えてほしいということで、再編集をして完成させたものである。経済史が専門の宮本又次の編集であり、玄洞の伝記事項に加えて社史の色合いも加味して編集刊行されている。伝記に会社史の色合いをあとから加えたということもあってか、山口玄洞の伝記と会社史との記述がいささか独立した記述になっている。本文中には父親が書き送った書翰「要用書」の全文が載る。また巻末には、『仰景帖』に収載された「先代山口玄洞講演」（昭和四年一月二十九日山口商店での最後の講話）、嗣子山口三郎「病間追想」、「役員一覽」、「略年表」が載る。

『仰景帖』京都 山口玄洞 昭和六一年（尾道市立図書館

所蔵分を「他館複写」で本学蔵書とした） 586.09/Yam

四代玄洞五〇回忌、五代玄洞一三回忌の法要を記念して第六代玄洞の手で刊行されたもので昭和一三年のものと同じ書名となっている。

この発行者山口玄洞の住所は左京区松ヶ崎小竹藪町二四とあり、

今回訪問した小竹藪町修道院のすぐ近くである。構成は、四代玄洞・

五代玄洞の写真に続いて、四代玄洞の事績について寄進寄贈をされた

関係者がその回想を書いている。それぞれが当事者というわけでもなく、

前任からの伝聞が多いが、寄進当時の様子とともに伝説的に語り継がれている

ように興味深い。これらについて関連の事項は本文に組み込んだつもりである。

この回想を書いているのは、天台宗座主山田恵諦、真言宗醍醐派管長麻生文雄、山科毘沙門堂門跡梅

山丹了、大徳寺長老立花大亀、別格本山高尾神護寺貫主谷内乾岳、

大本山百万遍知恩寺法主主林靈法、尾道市長博田東平、京都市歴史

資料館館長森谷尅久、財団法人阪大微生物病研究会深井孝之助である。

また昭和一三年版『仰景帖』と同様に寄進された寺院や上水道、

病院や会館の写真図版が一六二図ついている。そして京都新聞の昭和

四一年四月三〇日から五月一日まで「京都百年」シリーズとして

編集委員荒金喜義による一一回の連載記事が収録される。この記事は

おおむね中野楚溪『稱禪院略傳』によるものである。「稱禪院年表」も載るが

これも先の版の楚溪のものをそのまま収載している。さらに小竹藪町「京

都山口家本宅」の写真として「遊雲居」「庭園より比叡山を望む」「残月亭

（笠庵）」「水月亭」「田舎家（蛙吹庵）」「茶

室内部（額は近衛文麿）」「呼鷄（土間席）」「呼鷄外観」が載り、さら

らに明治期の山口玄本店、備後町の当時の本社、さらに昭和六四年

本社ビル完成予想図が付載されている。最後に六代の「ごあいさつ」

がありそこに六代夫妻および家族写真も載せられている。

森本輝郎編『水道・教育の恩人 故山口玄洞翁をしのぶ』尾道市役所 一九八二年

『日本名宝の旅・尾道 山口玄洞ゆかりの寺院と茶道名宝展』尾道市立美術館 日本経済新聞社共編 尾道市立美

術館 一九八八 289.1/Yam

標題紙には「市制施行九〇周年・新幹線新尾道駅開業記念」とある。

昭和六三年四月三日から五月八日の会期で開催された展覧会の

図録。ごあいさつなどのほかに、「山口玄洞の業績」として、その

生涯と寄附された寺院・公共施設の写真と説明、玄洞の遺墨、遺品、

ゆかりの寺院の住所が記され、別に「ゆかりの寺院と茶道の名宝」

が付される。また「列品解説」「山口玄洞（四代）年譜」が載る。

雑誌や図書に収載の論文・記事

井上徳平「山口玄洞翁―斯の人を―続―」『経済人』

一五（二）一九六一年

著者の肩書は三興社長とある。郷里を出て実業家として成功をおさ

める過程から、慈善事業、育英事業、伽藍贈塔事業にいたる寄進行

為、そして病を得て御車通の山口本邸で息を引き取るまでを述べて

山口玄洞の軌跡をたどる

いる。

宮本又次『大阪商人太平記明治後期篇下』創元社一

九六三年

6721/Miy

経済史家宮本又次の論考で、大阪で成功をおさめた商人のなかで、

「貿易の発展と貿易商社の人たち」の項目に、「山口玄洞の生いたち」

「山口商店を開業」など概説してある。「明治末期の本町通り（戸田

猶焦点の所）」や「山口玄洞商店のハッピ」などの写真も掲載される。

鷺谷樗風「船場大店の生活」『難波津 三』難波津社

一九六八年

市岡中学受験を失敗して台所番として奉公に入った鷺谷の玄洞の店の回想記。豊造と呼ばれた。店は丁稚が三〇人ばかりで手代が七

名、番頭五人、女中五人ほどの時代という。店での食事の様子や女

中のことなど店に住み込みの暮らしや仕事のことなどを振り返って

いる。豊造はといえば女中の部屋で貸本屋から借りた本ばかりを讀

んでいたと回想している。その後結核で仕事を辞めて早稲田大学に

はいり大阪に進出した時事新報が明治三八年に創設した大阪時事新

報に入社して記者をつとめた。『大阪物語』（一九四〇）、『維新の大

阪』（一九四二）、『大阪の史蹟めぐり』（一九四六）など多くの著作

を持つ。玄洞の店では特段番頭格になっただけでもなく、当時の店

の裏方の様子を描いている。

川端直正「山口玄洞」『郷土史にかがやく人びと 三』

大阪府一九七〇年

参考文献に『山口玄八〇年史』、『大阪商人太平記明治後期篇下』『東

区史 第五巻人物篇』が挙げられているが、中野楚溪『稱禪院略伝』

『八〇年史』をもとにして書かれたものである。

青木茂「第四章 山口玄洞翁の敷設費寄付」（『新修尾

道市史 第二巻』昭和四八年）

玄洞が上水道の敷設について寄付をする時期に尾道市役所に入入り

する機会が多かった著者の回想的な論考である。問宮英宗が市役所

に来て「百万円ばかり寄贈したいという篤志家があるのじゃが受け

てくれるか」といわれたという。初めは、からかわれているとおも

い、お引き取り願ったが、部内で検討してあらためてお伺いを立て

ると、それは問宮師であった。あらためて玄洞に打診すると、一切

無条件でお願いすることだった。青木は、旧版の『尾道市史』

を編纂中でもあり、玄洞に取材をして、市史の水道編と翁の申し出

の次第を別巻にするつもりであったが、時局もあつて巻数が減らさ

れ、その忸怩たる思いから、新版の『尾道市史』にこの一節を設け

たという。尾道市からは、玄洞の胸像を作りたいと申し出たが、一

言のもとに断られたといい、それでもなにか、と申し出たところ、

祖先からの屋敷鎮守の蘇和稲荷社を神社に昇格して今の海岸べりの

雑踏から祀り替えをすることを希望し、水源地の石碑に揮毫するこ

とを了承したという。それが、「澗甘露法雨」であった。

江川義雄「山口玄洞とその一族先人の業績」『医譚』（通

号 五九）日本医史学会関西支部一九九〇年

医家としての山口家について先行の玄洞伝記事項をもとに書き、山口玄洞の事績を述べる。そして医療機関への寄付に焦点をあて、とりわけ微生物病研究所および山口厚生病院についてその次第を示している。なお江川が参照した論文で、今回拙稿にあげられなかった玄洞関連文献は、阪田泰正『芸備両国医師群像』五二昭和五八年である。

江川義雄「山口玄洞とその一族先人の業績―続―山口左仲・山口寿」『医譚』（通号六〇）一九九一年五月

玄洞の末娘幾子の婿にあたる山口左仲と玄洞の弟山口隋三郎の婿養子山口寿の事績を追ったものである。左仲は明治二七年生まれ。大正七年岡山医学専門学校を主席で卒業し東京帝国大学医学部の医局に入り唾液腺病理の研究で学位を取得した。大正一四年京都にでて山口玄洞家の養子となり山口姓を名乗った。昭和二年京都帝国大学講師、昭和二五年には岡山大学医学部寄生虫学教室教授を兼任した。寿は明治三三年生まれ。東京の生まれで大正一三年東京帝国大学医学部を卒業し病理学教室、のち楠本長三郎大阪帝国大学学長の紹介で阪大第一内科に入局した。昭和九年微生物病研究所同研究会が創設となり理事・評議員、内科医長を兼務した。昭和一四年には微生物病研究所教授となった。

酒井 一光「聖トマス学院（旧山口玄洞邸）―時を超えた装飾タイルの美 新タイル建築探訪（三七）」『タイルの本』（三七）二〇一一年一月

著者酒井は大阪歴史博物館学芸員とある。山口玄洞本邸について、ステンドグラスやタイルが多用された館として紹介する。武田五一の建築物としての紹介記事である。外観だけでなく館内の写真も掲載している。参考文献としてあがるのは、『京都市の近代化遺産―近代建築編』（京都市文化市民局平成一八年）、『京都の近代化遺産』（淡交社平成一九年）である。

辻 忠男「創設資金寄付者 山口玄洞翁」『五十年のあゆみ―創立五十周年記念』大阪大学微生物病研究会編刊 一九八四年

微生物病研究所は昭和四年当時の大阪府立医科大学細菌学谷口腆二教授の発案、楠本長三郎学長がその意を受けて創設したもので、玄洞が昭和六年四月に創設資金二〇万円、さらに竹尾研結核研究所を合併してのちの昭和八年一二月に五万円を寄付して昭和九年九月竣工したものである。その後大阪帝国大学に移管となった。この文章は、そうした寄付者玄洞を顕彰するための文章で、その事績を示し最後に研究所の次第を述べている。なお研究所本館の玄洞には、「惟うに、本邦医界の現状は微生物研究機関の特設を以て急となす。山口玄洞君金二十万円を捐してこれが資となす。本研究よって成る。その濟世の志深しと謂うべし。勅して以て後に伝う」と金属のレリーフが掲げられているという。

宮本又次「山口玄洞のことどもと公共奉仕」『大阪大学史紀要』二号 一九八二年

『山口玄株式会社八十年史』を編集した宮本又次が玄洞の略歴を記したもので、八十年史の略伝をなぞったもの。「七玄洞の寄付行為と社会奉仕」の項で玄洞が大正七年に創立資金百万円を寄付した山口厚生病院のことが触れられている。この病院はその管理を大阪医科大学に委託され、この大阪医大はのちに大阪帝国大学医学部となった。

### 宮本又次「山口玄洞と山口厚生病院と微生物学研究 所」『大阪経済人と文化』一九八三年

玄洞の生い立ちからはじめて会社の経営、晩年の信仰生活、そして大正七年五月の山口記念病院の資金提供のことに触れている。玄洞の末娘幾子の婿は医学博士・理学博士山口左仲だが勤務を持たず研究に没頭したという。

### 廣岡幸義「安井樞次郎と山口玄洞―亀岡式 作品研究 その三」『日本建築学会近畿支部 研究報告集・計画系』四五二〇〇五年

玄洞の寄進した寺院の建築の多くを手掛けた京都府の古社寺修理技手安井樞次郎の作品について論じたもの。樞次郎が亀岡末吉のもと現場で働いたことから、一連の亀岡式作品のひとつとして論じられている。「安井樞次郎担当の修理建造物」「山口玄洞、安井樞次郎、亀岡末吉年表」「山口玄洞が建立した寺院建築」の表がつく。

### 「志海のごとく 評伝山口玄洞」『中国新聞』連載二 〇〇五年

平成一七年一月六日から六月四日までの二〇回分。

付記…この文献リストを作成するにあたって尾道市立中央図書館力石智氏の貴重なご教示をいただいた。お礼を申し上げたいと思う。



中野楚溪編『仰景帖』昭和13年（本学蔵）